

今なぜ対話か？

砂子岳彦

2016年12月3日

OECD エコノミックシンクタンクによると、数学と科学の分野における2015年の15歳の国別ランキングは、1位がシンガポール、2位香港、3位韓国、そして4位に日本がきます。上位のほとんどをアジア諸国が占めていました。一方で世界大学ランキングは、オックスフォード大学（イギリス）、カリフォルニア工科大学（アメリカ）、など上位にランク付けされたのは、ほとんどがアメリカかイギリスで、東大は39位でした（教育専門誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）、2016）。

ランク付けの水準が異なるので、一概に高校と大学を比較はできません。しかし、鼻屑目に見たとしても、高校ではそこそこ評価されていたが、大学の4年間で評価を下げていきます。この原因は为什么呢。評価水準が異なることが大きいのかもかもしれません。だとすると教育方法も問われることになります。

高校までは一方通行の講義形式で、知識を詰め込むことによって、直接的に学力を効率的に上げられます。そのなかで記憶に刷り込まれ、問題は反復して解かれます。それを大学に入っても続けるとしたら、そういう学力はつきます。しかし、教育レベルが高くなるほど〈問い-答え〉という枠組みではなく、問いそのものも考えたり、答えへの道筋を複数考えたり、解法よりもその背景にある考え方を考えたりする力が要求されます。すると、一方通行の講義形式よりも多面的な思考や思考そのものを深めていくことが必要です。

そのための教育方法として対話型授業が挙げられます。授業中の対話によってさまざまな観点からの意見を聴けるし、自分が発言するときは思考をまとめる力がつきます。サンデル教授が行った白熱教室が一時注目されました。そのなかで、教授は答えを言うわけではなく、学生たちの発言をサポートして意義ある方向に導くのです。受講生たちは自分の脳以外の他者の脳も動員して思考を深めていくことができるのです。このように対話は知識を深め発展させるのに素晴らしい方法であるといえます。ソクラテスの思考も対話によったのです。したがって、対話の目的は、自分や他者の考えを知ったり、思考を深めたり発展させることにあります。

そもそも対話とは何でしょうか。似たような言葉に、談話や討論があります。マトリク



スにして並べることによって、対話の性格を浮き彫りにしてみます。

図 対話のマトリクス

このマトリクスにおいてあえて雑駁に言えば、右に行くほど双方向でかつ自由、左に行くほど拘束条件がきつくなります。上に行くほど得る知識があり、下に行くほど少なくなります。

対話は言葉だけではありません。沈黙も一つの自己主張だし、沈黙していても伝わるものがあります。心的情報、言語情報、そして身体的情報が行き交ってコミュニケーションがなされます。

武道家は逆境のコミュニケーションを想定して日々稽古をしているといえます。戦国時代は、より早く、より強く的確に相手を殺傷する技術と体力を養っていました。ところが江戸時代になると長期の安定政権下で、そうした戦争状態から遠ざかるとともに、敵に勝つということからも離れて、一部、敵と調和する研鑽がなされていました。自分を殺しに来た相手と和するという方向性を見出したのです。合気道の開祖植芝盛平氏は「武は愛なり」という言葉を残しています。これは理想的な概念でありながら、武道家ですから実際に使える知恵として、その真理が語り継がれています。

地球上に自分一人しかいなくなることを想像してみてください。あなたはどんな人でもいいから対話できる相手を必要とするに違いありません。そのときの気持ち、そのとき抱く対話の目的はなんでしょうか。さきに対話の目的は、「自分や他者の考えを知ったり、思考を深めたり発展させること」と述べました。それはその状況では、あまりにも小さな目的と言わざるをえません。強いて言えば、対話は自分の存在にかかわることです。別の言葉で言えば、対話の目的は対話です。

心理学の実験で、極端な孤独状態を作るために学生を防音装置のついた小部屋に入れ、半透明の保護めがねをかけさせて視覚刺激を出来るだけ少なくするというのがかつてあったそうです。さらに、それぞれの視覚刺激を制限するために頭に気泡ゴム枕を当て、食事と排泄時以外ベッドに24時間横たわることを命じました。その結果、高額な報酬だったにもかかわらず、この孤独な実験に3日以上耐えられた者は、ほとんどいなかったそうです。

そうしてみると、対話とは存在にかかわることであることがよくわかります。人は他者といはじめて人たるのだと言えます。